人の犬に対する指示の展開

ー注意状態の推定と指示表現の選択に注目してー

平田未季(北海道大学)

1. はじめに

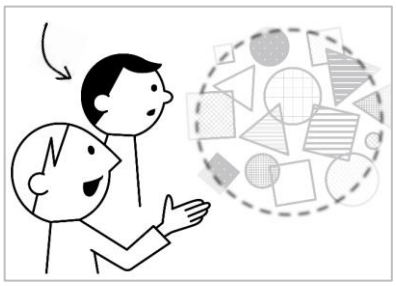
発話場面に存在する事物を指し示し，相手の注意を誘導する行為は人のコミュニケーションの基盤となる行為である（Tomasello,1999）．この指示場面で最も頻繁に用いられる言語表現は指示詞である（Diessel,2006）．指示詞は通言語的に複数の表現と統語範疇からなる体系をなしている（Diessel,1999）．平田（2020）では，同一母語の成人間の指示場面の分析から，発話者は相手の注意状態を推定し，その推定に基づき指示詞を切り替えていることを論じた．本発表では，人と犬とのやりとりに注目し，人の犬に対する指示行動は，人に対するそれとどのように異なるのかについて考察する．

2. 同一母語の成人間の指示連鎖

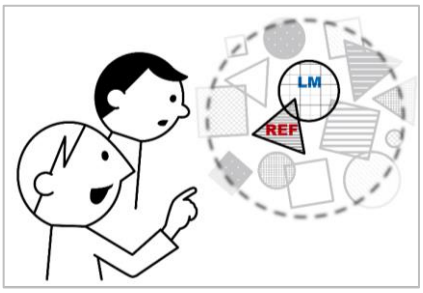
平田（2020）では，日本語母語話者間の屋外での会話データ（約5時間）の分析に基づき，視野内に複数の指示対象候補があるなど，指示対象の特定が比較的困難な場面において，発話者は以下の3つの段階を経て相手の注意を指示対象へ誘導し，共同注意（joint attention）を確立しようとすることを示した．

(1) 指示場面における3つの指示タイプ

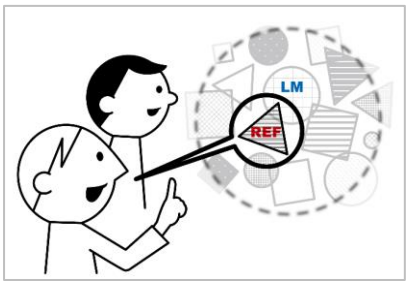
a. 注意の転換（attention-switching）　b. 注意の調整（attention-coordinating）　c. 共同注意の確立後



へえ，ああ**ここ**，ああ



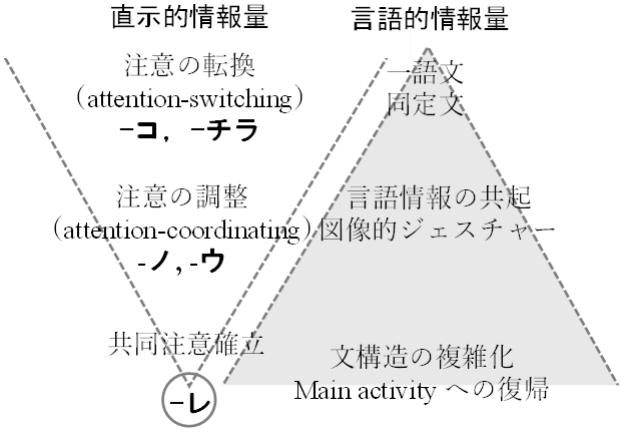
この辺のビルの一掴み，斉藤んちが(見える)



これに隠れてる辺り.16の西5の.

(1a) の指示は，指示対象が相手の視野に入っていないと発話者が判断した場面で行われる．発話者は，指示によって，相手の頭・顔・目の向きを動かし，相手の視線を指示対象が存在する空間に向けさせようとする．この指示では，手さしや腕を伸ばした指さしなどの大きなジェスチャーとともに，注意喚起語（attention-getter），そして位置や方向を示す空間指示代名詞（-ッチ，-コ）が選択される傾向がある．このように、(1a) の段階では直示的な（deictic）情報提供性が高いのに対し，指示詞を含む発話は一語文や同定文など非常に単純で短い構造をとりやすい．(1b) の指示は，相手の視野内に候補となりうる対象が複数含まれると発話者が判断した場面で行われる．発話者は，複数の候補の中から意図する指示対象を相手に検出させるため，ランドマークとなる対象および指示対象自体について，言語的な描写や図像的ジェスチャー（iconic gesture）といった非直示的な情報を提供する．これらの情報には指示詞が付加されるが，その際，言語情報には名詞句と統語的に共起可能な決定詞（-ノ）が，図像的ジェスチャーには様態を表す副詞（-ウ）が付加される傾向がある．この非直示情報の増加に伴い，発話構造は複雑化し，指示詞も発話の中に統語的に組み込まれる．最後に，(1c) の指示は，相手の反応・発話から，相手の視覚的注意が意図する対象に向けられていると判断可能な場面で，その共同注意が確立した対象を後続の談話に持ち込む際に行われる．多くの場合，指さしなどのジェスチャーは停止され，加えて，これまでの活動との切り替わりを示すため，指示詞が切り替えられる．この時，指示詞の中でも最も情報量が少ない指示代名詞（-レ）が選択されることが多い．直示的な情報提供性のさらなる低下に反比例するように，言語的な情報提供性は高まり文は複雑化し，発話者らは指示によって中断されていたMain Activityに復帰していく．この指示の過程を (2) に図示する．平田・趙・オリベイ

(2) 指示過程における直示的情報量と言語的情報量の推移



ラ（2021）では，この指示の 3 段階は，日本語のみならず，中国語，ブラジルポルトガル語でも観察できることを示した．

以上の研究より，発話者が，指示詞体系が含む複数の表現と統語範疇を利用し，発話場面に存在する指示対象に相手の注意を誘導しつつ，共同注意が確立した後は直示的情報提供性を低め，指示対象に関する言語的な情報提供に移行していることが分かった．「上」「右」などの空間直示表現や「ほら」などの注意喚起表現とは異なり，複数の表現と統語範疇を有するからなる体系性を有する指示詞は，相手の注意状態を考慮しながら，対象についての情報提供の内容や量を調整することができるのである．以上は，同一母語の成人間のやり取りを分析することで得られた結論である．では，同じ言語体系を有さない犬とのやりとりでは，発話者はどのように指示を行うのか．次章では人-犬間のやりとりから抽出した 3 つの指示場面を分析する。

3. 人の犬に対する指示

3.1 データの概要

発表者は，犬とその飼主 4 組の生活場面を約 4 時間録画・録音した．本発表で用いるのは，室内に GoPro を設置し飼主に随時録画をしてもらった室内データ（事例 1,3），発表者が犬と飼主の散歩に同行し撮影した散歩データ（事例 2）である．

3.2 データ分析

事例 1 では，飼主が犬に床の上に散らばった食べ残しを食べさせようとし指示を行っている．

事例 1 [2406_kar_00:11-00:30]

```
01      飼主：  *はいは+#いここも(.)*+ (1.0)        *今度こ-+#ここ (0.5) *こここここ    *+ (0.5)
        飼主    *床を指で何度か叩く--*               *指さす-------------*指で床を叩く*
        犬              +顔を向ける---+指されたものを食べる---+顔を上げ指の方を見る-------+床をなめる->
                         #Fig.1                                  #Fig.2
02      飼主：  *ここ                  *  ここ#     * (0.6)  *ここ! *ほれ,       *+こ::こだ!
        飼主    *指さしの手を犬の頭の上へ*手で頭を押す*頭をなでる*指さし*指を顔の前へ*手で顔を押す
        犬      ------------------------------------------------------------+押され顔を上げる->
                                          #Fig.3
03      飼主：  *こ:こ!ほら,*+          *(.)   え.      ほれ!+      *ほい!+ *よし.
        飼主    *指さし-----*指で床を叩く*食べ残しを集める----------*手を引く*体を起こす
        犬      ------------+顔をそむける#----------------+顔を向ける--+食べ始める---->>
                                          #Fig.4
```

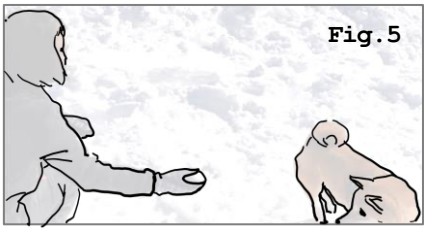
事例 1 の飼主の指示では，(1a) の「注意の転換」の段階と同様に，注意喚起語「ほら」「ほれ」と空間指示代名詞「ここ」が選択され，発話はすべて一語文という非常に単純な構造である．1 行目で飼主は「ここも」と発話しながら指示対象を指さすだけでなく，その指で床を叩く．これを受け犬は指された方に顔を向け，その場にあった食べ残しを食べ始める．人-人のやりとりとは異なり，事例 1 の飼主は，指さす方向に犬が顔を（そしておそらく視線も）向けただけでは指示が達成されたとみなさず，この食べ残しを食べるという行動を持って，指示が達成されたと捉えている．実際に，1 行目の次の指示で，飼主は別の場所を指さし「ここ」と発話し，犬はそちらの方に顔を向けるが（Fig.2），飼主は「こここここ」と指示を重ね，さらに指さしの指で床を叩く．この行為を受け，犬は床をなめ始めるが，それは飼主の意図した場所ではなかったため，2 行目で飼主はさらに「ここ」と繰り返しながら，指さしをしている手で犬の頭を押し，意図する場所に犬の顔（視線）を向

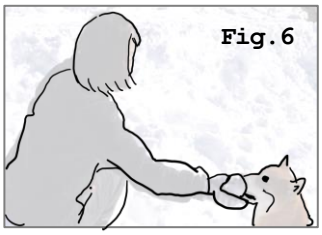
けさせようとする（Fig.3）．手で頭を押しながら「こ::こだ!」と強調する形で指示がなされ，犬は顔を上げるが，そのまま反対の方へ顔をそらせてしまう．それを受けて飼主は指示詞と指さしを用いた指示をやめ，食べ残しを認識しやすいように一か所に集めることで（Fig.4），指示の達成（=犬が食べ残しを食べる）を試みる．

事例2の飼主は，散歩の途中に公園で雪玉を投げ犬がそれをとってくるという遊びを行う．この事例では，空間指示代名詞ではなく，指示代名詞「これ」が選択されるが，指示詞を含む発話はすべて単純な動詞文もしくは同定文である．

事例2 [2202_tem_21:09-21:21]

```
01      飼主：                          +°おいで°
        飼主     *雪玉を犬の方に差し出す-------------------------->
        犬                              +雪玉を見ず飼主の前を通り過ぎる->
02      飼主：   こ-これ,こ+#れ,これ覚え          +て.
        飼主     ------------------------------------------->
        犬       ---------+立ち止まり顔を向ける+飼主に近づき止まる->
                          #Fig.5
03      飼主：   これ.覚*#えた¿                  覚え*た        覚えた.*+
        飼主             *犬の口に軽く雪玉をぶつける--*指で犬の顎に触れる*雪玉を前方に投げる
        犬       ----------------------------------------------+雪玉の方に走り探す
                         #Fig.6
04      飼主：   +(0.2)°はい,はいはいはい°.それでした#か.ほん+*¥と:にそ[れでしたか.¥
        飼主                                                  *右腕を下に下げる
        犬       +雪を咥え駆け戻ってくる-------------------+雪を下に落とし地面のにおいをかぐ
                                                   #Fig.7
```





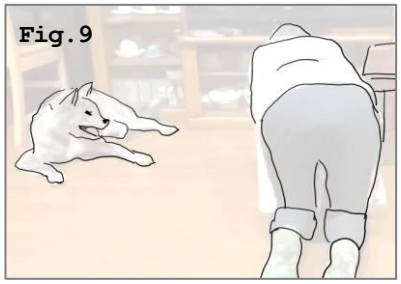
飼主の周りを歩き回る犬に対し，飼主は指示対象である雪玉を持った手を犬の方に差し出すという提示行動によって犬の注意をひこうとするが，犬は飼主の前を通り過ぎる（1行目）．そこで飼主は「これ」と指示代名詞をそれまでよりも大きな声で繰り返し発話する．これを受け犬は飼主に顔を向け（Fig.5）近づいてくる．これにより，犬の視線は指示対象である雪玉に向けられていると解釈可能な状態になるが，飼主は3行目でさらに「これ.」と言った後，犬の口に雪玉を軽くぶつけそのまま押し付ける（Fig.6）．この行動により，犬は雪玉を「覚えた」とみなされ，飼主は雪玉を遠方に放り投げる．選択された指示詞の違いはあるものの，事例2は，同じ指示詞を含む単純な発話が繰り返される点，犬が指示対象に顔（視線）を向けただけでは指示は成功とみなされず，物理的に対象を犬に接触させるという提示行動がとられるという点において，事例1と共通している．しかし，事例2では指示の達成（＝犬が雪玉を認識しくわえて戻ってくる）後にも発話が継続される．雪玉をくわえて戻ってきた犬に対し，飼主は指さしをせずそのままの姿勢で「それでしたか」「ほんと:にそれでしたか」と発話する．最初の指示が達成されたとみなされる状況下での発話であること，さらに直示的な情報提供性の低さから，この発話は（2）の「共同注意確立後」の指示に近いように思われる．しかし，人-人のやりとりとは異なり，発話構造は複雑化せず，直示的な情報提供性が減少しても言語的情報量は増加しない．

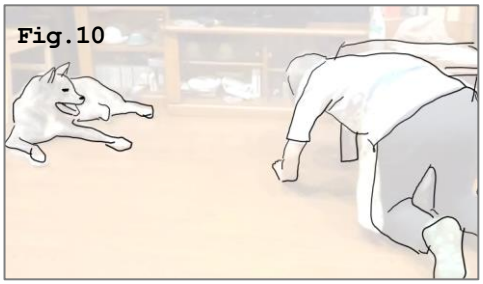
事例3では，遊んでいたボールがなくなり探し回ったが見つけられず座り込んでいた犬に，飼主はボールのありかを教えようと指示をする．飼主は座っていたソファーから立ち上がり，指示対象であるボールがある机の下に向かって這っていく．

事例3 [2407_kar_00:11-21:21]

```
01      飼主：   *+かる,いいか? ↑ほら! ほ*ら!      ここにあ*るでしょ.#  (0.5)  見えた?+  (2.0)
        飼主     *四つん這いで机の方に行く-*腕を伸ばし指さし*指さしたまま犬に顔を向ける--------------->
        犬        +伏せたまま机の方に顔を向けている--------------------------------+やや顔を前に-->
                                                                  #Fig.8
02      飼主：   ほら,そこに↑あるでしょ.*          見*    えないの?      *#そっから見えないか.
        飼主     --------------------*指を下げる--*机の方に寄って行く*#犬の方に体を向ける------>
        犬       ------------------------------------------------------------------------------>
                                                                                  #Fig.9
03      飼主：   *ここでしょ,    こ*こ!      (3.0)見hえ+hた?ち:が+:う?これ#こ*れ探してたんじゃないの?
        飼主     *下を見て床を叩く*犬を見る--------------------------------*体をずらし机下覗き込む->
        犬       ---------------------------------+顔をそらす+飼主に顔を戻す------------------->
                                                                                  #Fig.10
```

04　　飼主：　**これ**じゃないの¿**こ*れ**.(1.0)**こ*れ ここ**!　*ほれ.　(1.5)　　ほら!**ここ**にあるでしょ°ほれ°
　　飼主　　----------*犬を見る--*机下覗き込む*机の下に潜り込む----------
　　犬　　----------->





事例1と同様に，飼主は指さしをしながら，注意喚起語「ほら」と空間指示代名詞「ここ」を用い指示を行う．指示の発話はすべて単純な動詞文もしくは一語文である．事例3の特徴は，飼主の指示の発話の間ずっと犬が指示対象が位置する方向に顔（視線）を向けていることである．飼主は指示をしながら，何度も犬の方に顔や体を向け，その視線の向きを確かめ（1,2,3,4行目，Fig.9），「見えた?」と確認をしたり（1,3行目），「そっから見えないか」とつぶやいた後自らの体の向きを変え犬からの見えを確かめたりする（2行目）．このように，事例3の飼主は，指示を前に進めるにあたり，犬が指示対象に視線を向けているか否かを非常に重視する．3行目で，初めて犬が顔をそらすと，すぐに「ち:が:う?」と質問する．その後犬が再び自分に顔を戻すと，「これ」と指示詞を空間指示代名詞から代名詞に切り替える．これは，人-人のやりとりにおける（1a）から（1c）への移行に類似している．また，発話も初めて他動詞文となりやや複雑化する．このように，事例3の飼主は，犬の顔（視線）の向きを確認しながら指示詞の切り替えを行うという点で，事例1,2とは大きく異なる．しかし，その後犬が指示対象に顔を向けつつもその場から動かないことから，「これじゃないの¿」「これ」と再び発話文は単純化し，「これここ」と指示詞も再度空間指示代名詞に切り替えられ，「ほれ」「ほら」と注意喚起語も用いられ始める．さらに，飼主は指示対象のボールをとろうと机の下に潜り込む（Fig.10）．ここから，事例3の飼主もまた，犬が指示対象に顔（視線）を向けているだけでは指示が達成されたとみなすことができず，提示行動に移ろうとしていることがわかる．

4. 考察

以上，人が犬に指示を行う3事例をもとに，人-人の指示と人-犬の指示の違いについて分析を行った．藤崎（2002）は，人の犬・猫に対する発話を「注意喚起」「指示」「質問」等に分類し，犬・猫が「注意喚起」や「指示」の発話に応じない場合，多くの飼主は「質問」など内的状態を問うやりとりを続けることから，飼主が犬・猫の行動の背景に内的状態，すなわち心を見出していることを指摘した．実際，事例3の飼主は，犬が指示対象から顔（視線）を逸らした時に，「ちがう?これ探してたんじゃないの?」と，犬に‘心’の存在を仮定するような質問を行っている．一方で，相手の注意状態の変化に応じて（1a）から（1c）へと進む人-人の指示とは異なり，事例1から3の飼主は，犬が既に意図する方向に顔（視線）を向けていても（1a）の注意転換タイプの指示にとどまっていた．さらに，最終的には指示対象を犬に物理的に接近させる提示行動などによって指示の達成を試みていた．この飼主の行動は，犬が自らの発話を理解していないこと，発話により犬の注意状態は変化しないことを前提としたものであるように思われる．ただし，同じ伝達体系を共有しない相手であっても，飼主は，犬の聴覚に訴える物理的な音を立てるのみならず，あくまで言語体系を用いて指示を行っており，さらに，飼主の中には，事例2，3のように，やりとりの中で指示詞の切り替えに近い行動をとる者もいた．この違いは，飼主が犬にどの程度‘心’の存在を想定するかにより生じるようにも思われる．指示行動の異なりとそれを生む要因について今後も分析を行いたい．

謝辞　本研究は，JSPS科研費22K00546の助成を受け行われたものである．

参考文献

Diessel, H.(1999).*Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*.Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Diessel, H.(2006).Demonstrative, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics* 17(4), 463-489.
藤崎亜由子(2002).人はペット動物の心をどう理解するか―犬猫への言葉かけの分析から 発達心理学研究13(2), 109-121.
平田未季(2020). 共同注意場面による日本語指示詞の研究 ひつじ書房
平田未季，趙 文騰，デ・オリベイラ・パイバ・ドウグラス・エンリケ（2021）．なぜ指示詞はつねに複数の代替形と統語範疇を有するのか 日本言語学会第163回大会予稿集，220-226.
Tomasello, M.(1999) *The cultural origins of human cognition*. Cambridge: Harvard University Press.